

中国人留学生の日常生活スキルの検討 及びキャリア発達支援に関する研究

友納 艶花

九州女子大学人間科学部人間発達学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2014年11月13日受付、2014年12月18日受理)

要 旨

本研究では、留学生向けのよりよいキャリア発達支援を行うことを目的に、中国人留学生を対象に半構造化面接調査を行った。経済発展に伴い養育・教育環境などが変化し、従来の留学生に比べ一人っ子が増えている中、現在の留学生の日常生活スキルがどのような状態なのかを調査した。その留学過程において目的や進路に対する意識変化の有無を検討すると共に、求めているキャリア発達支援について明らかにした。そして分析の結果、留学過程において、初期の留学動機が漠然としていた状態から「明確化」できるようになり、心理的意識の変化が見られた。日常生活スキルにおいては、「個人的スキル」が向上できたことに留学生生活満足感が得られているが、「対人的スキル」ではそれが得られていないことが解った。また、対人関係上の問題で充実感を獲得できる経験が、留学生が求めているキャリア発達支援の大事な要素であり、重要な留学動機づけになるという新たな知見が得られた。

I. 問題と目的

下村(2008)は、キャリア発達理論が進路を決めるということから「経済を中心とした様々なグローバル化、コンピューター技術の急速な進展によって、従来とは比較にならないキャリアをめぐる環境変化のスピードが速くなっており、長期的に将来を見通すことが難しくなっている」と指摘している。一方、今日、グローバル化が一層進むなか、キャリア向上を目指して、自国だけに留まらず、海外に行って青年期を過ごす留学生が増えている。独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)の統計によると、日本への留学生総数は平成25年が135,519人となっており、前年に比べ2,237人減っている状況ではあるが、中国からの留学生数は60%以上を占めている(図1)。そのうち、80%の留学生が私立大学に在籍している。そして、彼らの大半は一人っ子である。留学は相互的、多面的な時代に入っているものの、文化・習慣などが自国と大きく違うことから、心構えがあったとしてもカルチャーショックなどを起こすのが一般的である。

近年の中国人留学生は、本国経済の発展に伴い、育てられた養育環境や教育環境が従来の留学生と異なっていることから、「新人類」でありながら心理状態は「混迷」が現れている(範, 2005)と言われている。また、「聡明、幼い、依存性が強い、挫折に耐えられない、

理想が高い、平等意識が強い」などの特徴も示唆されている。しかしながら留学生の実際の日常生活スキルの状態についてはこれまであまり検討されていない。

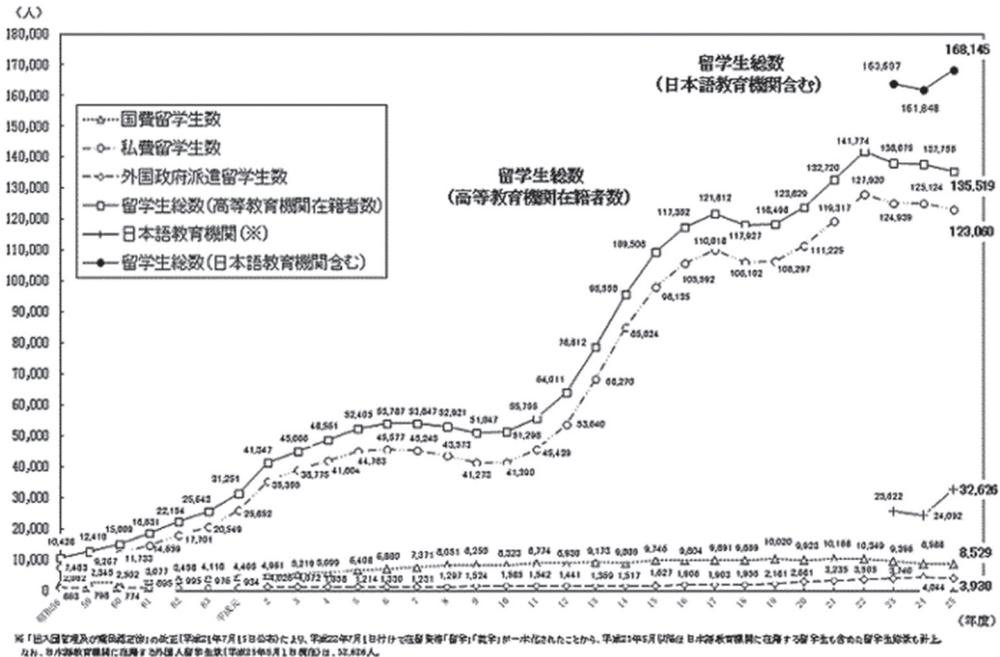


図1 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) の留学生数の推移 (H25年5月1日現在)

また、Supper (1980) によれば、キャリア発達段階は5つの段階に分けられ、①成長段階 (0～14歳) ②探索段階 (15～24歳) ③確立段階 (25～44歳) ④維持段階 (45～64歳) ⑤衰退段階 (65歳～) となっているが、留学生の多くは②の探索段階に該当する。つまり、青年期というキャリア形成、キャリア選択の最も重要な時期に位置しているのである。そして、大まかに初期の「ハーネムン (自由・新鮮) 期」、中期前期「緊張・不安定期」、中期後期「模索・探索期」を経て、後期には「価値の発見」による適応状態を迎えるパターン、もしくは「失落・虚無」状態に陥るパターンがあり、留学中のキャリア発達支援が特に重要であると言える。通常、留学生向け支援は、日本語教育、メンタルヘルス、キャリア支援の3つの側面によって構成され、キャリア支援とは進路・就職支援を指す。そして、これまでの研究として、手嶋ら (2009) による学歴志向性と職業志向性を用いたキャリア発達に関する留学生と日本人学生の比較研究があり、中国人留学生は「大学院」志向が高く、職業上での能力発揮のため留学体験そのものが志向されることが明らかになった。また、西谷 (2011) は、一橋大学の全学共通教育科目「日本事情 I」における取組として、日本の就職活動概要の説明、人事担当者の企業紹介、就職スキルトレーニングの活動を通してキャリア支援について考察を行っている。このように、日本語教育と就職サポートなどについての教育機関の立場から提供しようとしている先行研究が見られるものの、留学生自らのような

支援を求めているのかという最新の検討が必要であると思われる。なお、従来の研究においては質問紙調査が多く、面接調査はほとんど行われてこなかった。本研究では質問紙調査法では得られない深い情報や、対象者の意識や経験のデータとして得ることができる半構造化面接形式で調査を行うことにした。

以上のことから本研究では、中国人留学生自身が持っている「日常生活スキル」と「留学生生活満足度」との関連を図り、更に、留学生が求めているキャリア発達支援の要因について検討を行うことを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象

中国人留学生17名（男子9名、女子8名）、平均年齢22歳（SD=1.30）

2. 調査時期

平成25年の7月～9月

3. 調査場所と時間

調査対象者との話し合いで合意されたA大学の某研究室。平均面接時間は45分程度。そのうち5分～10分の質問紙調査を実施した。

4. 実施方法

調査実施においては女子大学1校と男女共学大学3校に募集案内を提示した。その後、応募してきた中国人留学生に再度詳細な研究目的と方法について説明を行い、最終的に承諾を得た留学生を対象に調査を行った。被調査者のプロフィールを表1に示す。

質問紙は島本・石井（2006）により作成され信頼性と妥当性が検討された「日常生活スキル尺度（大学生版）」を用いた。本尺度は「効果的に日常生活を過ごすために必要な学習された行動や内面的な心の動き」と定義され、留学生のスキルを多面的にとらえることができると判断し、本研究で使用することとした。この尺度は、個人場面で展開されるスキルである「個人的スキル」（「計画性」「情報要約力」「自尊心」「前向きな思考」と対人場面で転嫁されるスキル「対人的スキル」（「親和性」「リーダーシップ」「感受性」「対人マナー」）を測定する全24項目より構成されている。各項目については「1. ぜんぜん当てはまらない」～「4. とても当てはまる」の4段階で評定を求めた。この評定値は得点が高いほどスキルの獲得レベルが高いと見なされるものである。

半構造化面接用の調査内容は先行研究を参考に独自に調査項目を準備した。内容の大枠は、初期の留学動機・目的、留学生生活満足度、進路意識の変化の有無、留学過程で困っていること・悩み、キャリアを引き出すために望ましい支援などであった。

表1 面接調査対象者のプロフィール

	性別	年齢	在籍身分	専攻	来日期間	兄弟状況	来日前の日本語能力	現在の日本語能力
A氏	男	23	1年生	心理学	3年	一人っ子	殆どできない	日本語学校卒業証明
B氏	男	23	2年生	化学	4年	一人っ子	4級程度	N1
C氏	男	24	3年生	商学	4年	一人っ子	N2	N1
D氏	女	23	4年	心理学	2年半	あり	簡単な会話レベル	N1受験中
E氏	女	21	3年生	経済学	6ヶ月未満	一人っ子	N3	N3
F氏	女	21	3年生	経済学	6ヶ月未満	あり	簡単な会話レベル	N1受験中
G氏	女	22	4年	心理学	1年半	一人っ子	N2	N1受験中
H氏	女	24	4年	心理学	3年半	一人っ子	殆どできない	N2、N1受験中
I氏	女	22	4年	心理学	3年	一人っ子	殆どできない	N2、N1受験中
J氏	女	23	4年	心理学	1年半	一人っ子	簡単な会話レベル	N1受験中
K氏	女	21	3年生(短留)	経営学	6ヶ月未満	あり	簡単な会話レベル	なし
O氏	男	22	3年生(短留)	経済学	6ヶ月未満	一人っ子	殆どできない	なし
P氏	男	21	3年生	経済学	6ヶ月未満	一人っ子	簡単な会話レベル	N2受験中
Q氏	男	24	2年生	経営学	4年	一人っ子	殆どできない	日本語学校卒業証明
R氏	男	22	2年生	商学	3年	一人っ子	殆どできない	日本語学校卒業証明
S氏	男	25	2年生	経済学	2年半	あり	簡単な会話レベル	N1級
T氏	男	21	1年生	経済学	2年半	一人っ子	殆どできない	N2

N1：日本語能力試験1級、N2：日本語能力試験2級

III. 結果と考察

1. 中国人留学生の「日常生活スキル」と「留学生生活満足度」との関連

留学生の日本での生活スキルがどのような状況なのか検討するために、「日常生活スキル」を「個人的スキル」と「対人的スキル」に分け、「留学生生活満足度」との相関を求めた。その結果、「留学生生活満足度」は「個人的スキル」($r = .55, P < .05$)と「日常生活スキル」($r = .49, P < .05$)との間で正の相関が見られたが、「対人的スキル」とでは相関がみられなかった(表2)。

表2 「日常生活スキル」と「留学生生活満足度」との相関係数

n=17		対人スキル	個人スキル	日常生活スキル
留学生生活満足度	Pearson 相関係数	.31	.55*	.49*
	有意確率	.22	.02	.04

* $p < .05$

「個人的スキル」は自ら計画を立てて物事を進めたり、そのため情報を集めたりして自分が自信を持つようになるような内容であった。留学生が個人で選択した留学に対して異国生活の中、自ら行動計画を立て、場合によってはアルバイトをして生活費が稼げるようになること、更に、生活情報を集めたりすることができるようになり、保護者と離れて自立生活ができたことが個人スキルとして満足を得ていると考えられた。留学生を送る過程で自分自身をポジティブに捉えて自己評価が高まっていることが推測された。ところが、「留学生生活満足度」と「日常生活スキル」の下位尺度で、他者を受け入れる、共感する姿勢や気軽に相談す

る、あるいは他者との適切な方法で接するスキルである「対人的スキル」との間では相関が見られなかった。比較的「個人的スキル」に対し、「対人的スキル」の側面では留学生活の満足度との関係が得られなかったと推測される。

次に、男女群に分けて、「日常生活スキル」に有意差があるかどうか t 検定を行った結果、8つの下位因子の中、「親和性」において、 $t(16) = .29, P < .01$ 、「自尊心」において、 $t(16) = -.43, P < .05$ によりそれぞれ男女に有意差が見られた(表3)。両方とも男性が女性に比べて平均値は有意に高かった。一般的に女性の方が他者との関わりを求める傾向が強いと言われているが、本結果では男子留学生のほうが高い「親和性」得点が見られた。育ち慣れた環境と異なる生活環境では男性の方が孤独感を感じやすく、友人あるいは親身になってくれる相手を求める傾向が女性より強いことが考えられた。また、Brooks (1984)によると「自尊心」はアイデンティティ発達・人生の目的スキルの自尊心の維持(島本ら、2006)であることから男子留学生が自分の人生や言動を重視している側面の要因もあり、今回の結果では得点が高かったことが考えられた。

表3 日常生活スキル下位因子の男女別平均値と t 検定結果

		男性	女性	t 値
親和性	平均値	.77	.42	.29 **
	SD	2.32	1.19	
リーダシップ	平均値	.53	.42	.64 n*s
	SD	1.59	1.20	
計画性	平均値	.52	.33	1.93 n*s
	SD	1.56	.93	
感受性	平均値	.54	.61	-2.18 n*s
	SD	1.62	1.73	
情報要約力	平均値	.92	.57	.10 n*s
	SD	2.76	1.60	
自尊心	平均値	1.05	.56	-.43 *
	SD	3.15	1.58	
前向きな思考	平均値	.62	.46	-.19 n*s
	SD	1.86	1.30	
対人マナー	平均値	.80	.50	.07 n*s
	SD	2.40	1.41	
日常生活スキル 尺度	平均値	4.15	2.31	-.07 n*s
	SD	12.45	6.55	

** $p < .01$, * $p < .05$

2. 留学動機・目的についての心理的变化

逐語録はプライバシーを保護するため、個人が特定されないように配慮した。また、発言内容はKJ法によって分類した。留学当初の動機・目的は、「異文化体験・視野拡大・海外体験」が47%、「国外修了証の魅力・就職に有利」が47%、「自然・環境・安全面のよさ」が17%、「親戚がいる・親離れしたい」が41%であった(図2)。範(2005)は、中国の経済発展と国際的人材が求められている事情により、社会的価値観が急変化していると指摘している。そして、流行っていることのひとつが「知力投資」として子どもを海外へ送って学ばせる「鍍金」と呼ばれる投資で、「教育のブランド志向」が提示されている。本研究の留學生の動機・目的には環境・安全面を考慮しながら就職の有利さを得ることを期待している「望子成龍・望女成鳳」な親の支持が推測される。親が男の子には「龍」、女の子には「鳳凰」という形で一人っ子だからこそ出世をさせたいという傾向が考えられた。

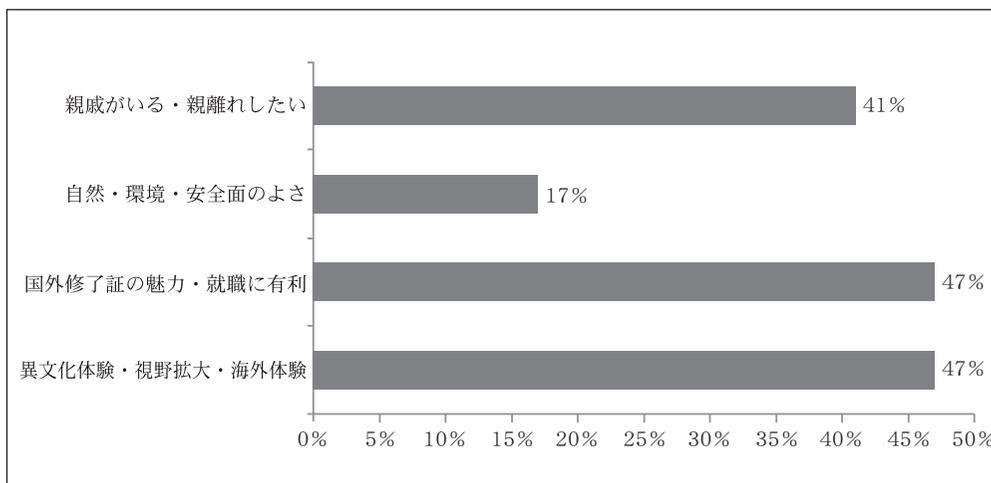


図2 留学前の動機・目的

このように、ほとんどの留學生が来日前は進学、就職、帰国などあらゆる可能性を考えていたが、留學生活を送る中で、「進学希望」29%、「日本就職希望」53%、「日本での進学或いは就職」12%、「帰国就職」6%と、日本で進学を希望する、或いは就職を希望する心理的变化が明らかに見られた(図3)。多くがもっと日本で自分を磨きたいという意思が見られたこの結果からは、彼らが日常生活の中で対人スキル問題にある程度悩みを抱えているにも関わらず、大学での修学、或いは留學生活を非常に意味のあることとして肯定的に捉えていると考えられた。インタビューの中で、「親離れして自立できたことが意外に嬉しかった(Cさん)」、「一人暮らしができて、自分の力で自分を養うことができた(Dさん)」、「自分でご飯を作るようになり、海外で一人で暮らせることができた(Oさん)」などの発言があった。彼らは自国で育ちながら親に頼れることを誇る一方、親への依存から抜けられ

ないのではないかというような無意識の不安を抱いて葛藤していたものが、留学生活を通して「自己管理」ができ、自立へと踏み出せたことに価値と喜びを見出していると考えられた。さらに、日本での学習や就労経験を通して一層自己効力感を高めたい、自信を持ちたい考えが窺がえた。

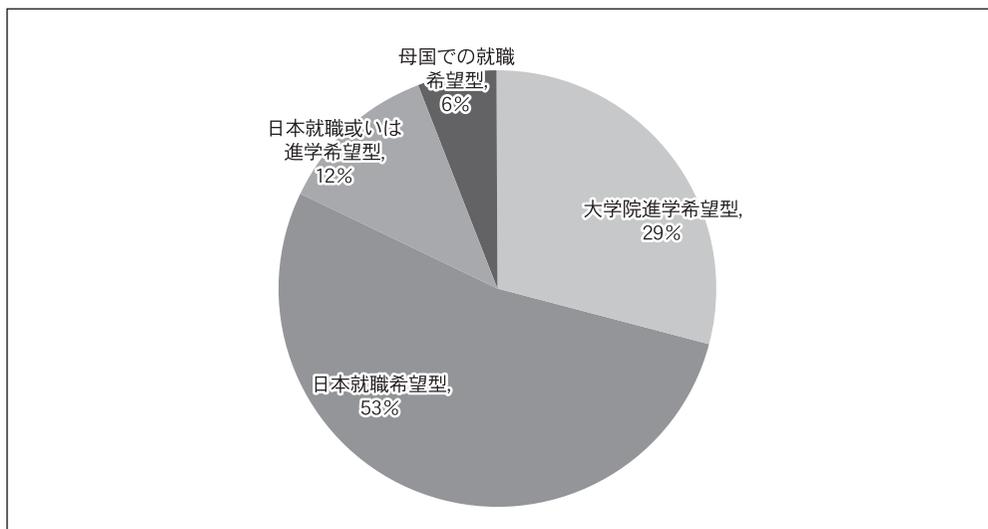


図3 留学過程に生じた動機・目的の変化結果

3. 留学生の「悩み・困っていること」について

今回、留学生の悩み事、困っていることを集計した結果、「日本語（専門知識）の勉強」47%、「進学・就職活動」29%、「日本人との接し方、交流の仕方」29%、「孤独・気分の変調」23%、「プライベート的な相談事」47%であることが分かった（図4）。特に専門知識の勉強、進学就職活動の内容は、個人的スキルを伸ばしたいということであり、専門研究領域の学びを高めたい意思が強い分、日本語という言語の壁に困っている状態が考えられた。しかし、陳・高田（2008）によると中国人留学生の7～8割前後が「研究や勉強や試験の悩みを理解し、励ましてくれる」「授業の内容がわからないことを易しく説明してくれる」「努力を認め、肯定的に評価してくれる」など研究領域でサポートを得ていると示している。そこで、本研究の結果からは、在学中の単位取得の悩みより、進路に直結する勉学や活動に関する悩みの方が大きいということが窺がえた。

次に多かったのが、「孤独感」や「日本人学生との接し方・交流の仕方」への悩みであった。前述の結果と考察1では「対人的スキル」と「留学生生活満足感」では明確な相関が見られなかったが、面接調査では、多くの留學生が異文化接触において、日本人学生との付き合い方が分からなくて困っていることが示された。青年期という発達段階において、似ている価値観を持ち共有できる友人関係を作り、社会経験を深めることが重要であるが、この時

期に異文化環境で異なる価値観を持つ同世代の学生との関係づくりに戸惑いを感じていることが推測された。そして、交流の仕方の教えや互いに知り合う場を求めていることが考えられた。

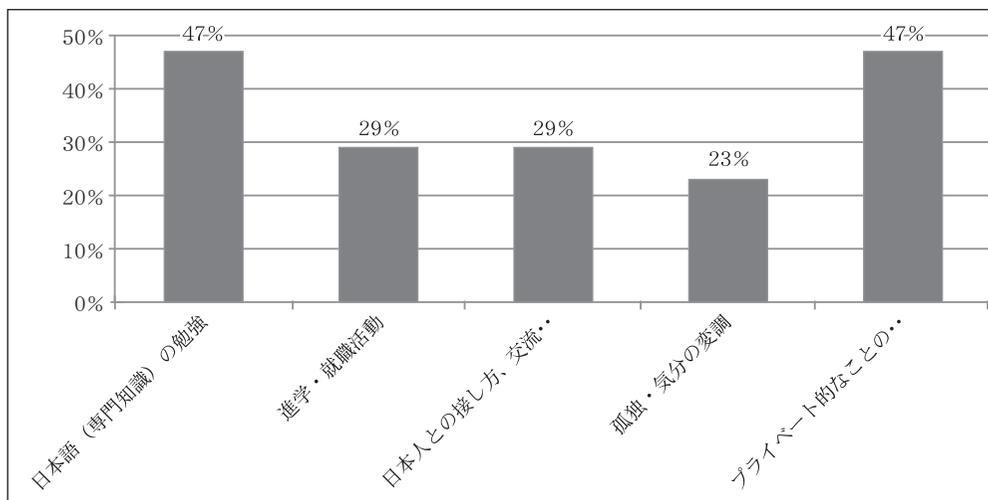


図4 留学生の悩み・困っていること

4. 中国人留學生が望むキャリア発達支援について

図5で示している通り、留學生が望んでいる支援は、「課外文化科目」29%、「インターンシップ等実践科目」41%、「進学就職手続き情報説明会」59%、「就職に有利な資格講座」29%、「就職で採用されるための対策講座」41%、「人付き合い講座」47%、「グループ会・交流会」59%、「人生設計・進路相談」11%、「奨学金・住宅保証人制度」23%であった。そこで、中国人留學生が望むキャリア発達支援要素を次の4つのパターンに分類することができると思われる。

「課外文化科目」「インターンシップ等実践科目」は現在の教養あるいは専門教育科目課程だけでなく、より実践的体験的な内容を求めていることが窺えることから「学外実践教科支援要素」と命名した。次に、「進学就職手続き情報説明会」「就職に有利な資格講座」「就職で採用されるための対策講座」からは、日本国内での進学や就職に関心が熱く、情報や対策への不安と要望が考えられ、「進路支援要素」と命名した。また、「人付き合い講座」「グループ会・交流会」が占めている割合が高く、留學生が日本人学生との交流、特に付き合い方が分からなくて困っていることが考えられた。留學生が日本社会に馴染みにくく、同じ国の人同士が群れている場面を多く見かけるが、本研究からはこのような現象は彼らがどのように現地の人と関わればよいのか方法を得なかったことが明らかになった。そこで、「対人接し方支援要素」と命名した。最後に「人生設計・進路相談」「奨学金・住宅保証人制度」からは個人の生活レベルにおける援助を求めていることから「個別事情支援要素」と

命名した。特に、本研究で得られた「対人接し方支援要素」はこれまでの先行研究ではあまり示されなかった新たな支援要因が窺えたことから、今後の留学生向けの支援の方向性が示されたと考えられる。

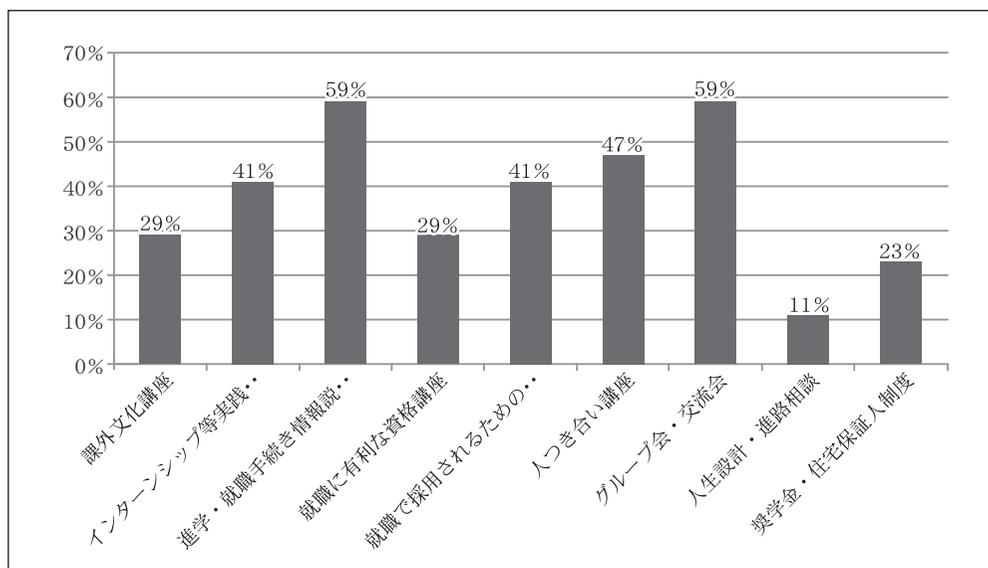


図5 留学生が求めているキャリア発達支援

IV. まとめと今後の課題

本研究では、中国人留学生の「日常生活スキル」と「留学生生活満足度」との関連を図り、更に、留学生の悩み事と求めているキャリア発達支援について検討を行った。その結果、①質問紙調査を通して、「留学生生活満足感」の高さは「個人的スキル」の高さと関係があるが、「対人的スキル」とは関係が認められなかったことが明らかになった。②留学中の日常生活スキルにおいて、男子が女子より「親和性」「自尊心」領域の得点が高かった。③日本人との接し方が解らず「対人接し方支援」を求めていることが重要な支援要素として示され、今後の留学動機づけにつながるという新たな知見が得られた。しかし、本研究ではまだ多くの課題も残っている。今回は一部の地域（中国）の留学生のみを対象に行ったもので、面接対象者募集における限界があったことから、対象者が少なく、今後の研究工夫が必要であると同時に、得られた知見の実践研究も課題として残っている。

謝辞：本調査研究時にご協力賜った大学の先生方、留学生の方々に厚くお礼を申し上げます。

また、本研究は九州女子大学・九州女子短期大学の平成25年度特別研究費を受けて行った研究であり、この場をお借りして御礼申し上げたい。

【引用・参考文献】

Brooks,D.K.,Jr. (1984) . *A life-skills taxonomy: Defining elements of effective functioning through the use of the Delphi technique*. Un-published doctoral dissertation, University of Georgia, Athens.

陳 金娣・高田谷久美子 (2008) . 在日中国人留学生の勉学・生活におけるソーシャルサポートの特徴とその効果 山梨大学看護学会誌,6 (2) , 17-24.

範 玉梅 (2005) . 日本語学校における一人っ子の中国人留学生増加に伴う問題 大阪大学日本語研究, 17, 59-90.

西谷まり (2011) . 留学生のキャリア支援：全学共通教育科目「日本事情 I」における取組 一橋大学国際教育センター紀要, 2, 133-140.

島本好平・石井源信 (2006) . 大学生における日常生活スキル尺度の開発 教育心理学研究, 54, 211-221.

下村英雄 (2008) . 最近のキャリア発達理論の動向からみた「決める」について キャリア教育研究, 26, 31-44.

Supper,D. (1980) . *A Life-Span. Life-Space Approach to Career Development*. Journal of Vocational Behavior, 16, 282-298.

高井次郎 (1989) . 在日外国人留学生の適応研究の総括 名古屋大学教育学部紀要, 36, 139-147.

手嶋慎介・松原敏浩・薛 曉梅 (2009) . 学歴主義とキャリア発達に関する研究—日本の大学生と中国の大学生の比較を通して 経営行動科学学会第12回年次大会論文集, 70-73.

Examination of life skills of foreign students from China and study for career progression support

Enka TOMONO

Faculty of Humanities, Department of Education and psychology,

Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

We conducted a semi-structured interview survey with Chinese students aiming at better career progression support for international students. We researched the picture of today's foreign students' life skills amid an increase of foreign students who are the only child as their nurturing and educational environment changed with economic development. We examined the change in the students' attitudes for goals or career options during overseas education, and brought out which career progression support they need. As a result of the analysis, we found psychological changes in students' minds that their initially undefined reasons for studying abroad have come to be clarified in the process. As to life skills, students are satisfied with improvement of their "subjective skills", but not with their "interpersonal skills". This study brought new insight that the experience of achieving contentment in interpersonal relationships is the important element of career progression support that foreign students really need and could become the key motivator for studying abroad.

Key words: Chinese students, Life skills, Career progression support